



調査・研究 報告

富士山縁起の赫夜姫説話

富士市立博物館 学芸員 大高康正

● ● ●

全国各地にかぐや姫の物語の舞台とされている場所はある。富士市もその舞台として現在まで語り継がれてきた場所のひとつであるが、富士市のかぐや姫伝説の大きな特徴は、富士山信仰と密接に絡み合って伝えられてきたことにある。富士市に伝わるかぐや姫伝説では、かぐや姫は最後に月に帰ってしまうのではなく、富士山に登って忽然と消えてしまうことになっている。そして姫は富士山そのものの祭神となった。この伝説は中世の富士山縁起が下敷きとなっている物語である。富士山縁起の詳細については、『富士山縁起の世界—赫夜姫・愛鷹・犬飼—』（富士市立博物館企画展図録、2010年）を参照いただくとして、今回は当館所蔵・六所家旧蔵資料『富士山大縁起』（卷子本）の中に登場する赫夜姫説話の部分を現代語訳して紹介したい。つまりは、地元で伝わるかぐや姫伝説のもとになる「赫夜姫」の物語である。

● ● ●

昔むかし、延暦の頃（782～806）のお話です。東海道の駿河国、乗馬の里に老人の夫婦が住んでいました。お爺さんは箕をつくって生活しており、「作竹の翁」と呼ばれ、いつも鷹に愛情を注いでかわいがっていました。お婆さんは、飼っている犬をいつもかわいがってました。この老夫婦には一人も子供がいなかったのです。

ある時、竹林の竹の中から一寸六分（6cm弱）ほどの小さな小さな女の子の赤ちゃんを見つけました。老夫婦は不思議に思いましたが、赤ちゃんを錦につつんで大切に育てました。すると赤ちゃんはすくすくと育ち素敵な姫に成長します。顔立ちはとても美しく、穏やかな口調は心地良い音楽を奏でているようでもあ

り、柔和な性格で決して取り乱すこともなく、話し方もわかりやすく、ひとたび微笑めば百倍もの色気となり、肌は雪のように白く、髪は青柳の糸のように細く、紅を引いたような赤い唇^{くちびる}で、手足もしなやか、まさに国^{くに}中に並ぶもの^{にじゅう}のいないほどの美女に成長したのです。姫は常にかぐわしい良い香りがしており、その身体から神々しい光をはなっていました。その光のせいで夜でも昼間のように周囲は明るく、そこから「赫夜姫」と名付けられました。

老夫婦はかぐや姫をそれはそれはかわいがってました。そしてかぐや姫が16歳になったころ、時の天皇である桓武天皇^{かんむ}が全国各地に使いを出して、自分の后^{きさき}にするための美女を探させます。東海道方面には坂上田村丸^{さかのうえ たむらまる}（田村麻呂）が使いとして下向してきました。田村丸は乗馬の里で老夫婦の家に宿をとりますが、夜になっても火を燃やしているような輝きがあり、田村丸はお爺さんに「なぜ夜になっても、いつまでもあのように火を燃やして明るくしているのか。」と聞きました。すると、お爺さんは「あの光は火を燃やしているわけではありません。私の養女がはなっている光なのです。」と田村丸に答えます。

田村丸はこれを聞くと不思議に思い、そんな姫がいるのならぜひ対面したい、とお爺さんに言いました。田村丸はかぐや姫と対面しますが、他にくらべようもない顔立ちの美女で、大変に驚きました。田村丸はかぐや姫に「わたしの主^{あるじ}の天皇が美女を探すため、全国各地に使いを出していますが、あなたはまさにその探している美女です。すぐに天皇のお后になる準備をしてください。わたしはすぐに都にのぼって、天皇にあなたのことを伝えてきます。」と言うと、都に戻っていきました。

かぐや姫は老夫婦に言いました。「人の一生という



ものは、他人の宿^{やど}を借りたようなものです。ただ^{まほろし}幻
の中で夢を見ているようなものです。雷の一瞬の光や
露^{つゆ}の滴^{しずく}のようでもあります。天皇の使いがもう一度
戻ってきたら、私はお后としてしばれることは望ん
でいません、と伝えてください。わたしは世の中と隔
絶^{はんにゃさん}して、般若山^{いわや}（富士山）にある岩屋^{どうくつ}（洞窟）の中
に入ろうと思います。」と。

老夫婦はかぐや姫に言います。「少しの時間でも姫
の顔を見られないことが辛く耐えられないというのに、
ましてや富士山の岩屋に入ってしまうなんて。あの山
は、誰も怖れて登らないという山ではないですか。
そんな山の中に姫を残して身捨ててしまうことなど、
わたしたちにできるわけがないでしょう。そのような
願いは、わたしたちの生涯、許すものではありません
よ。」と。かぐや姫はすると老夫婦に言いました。「た
とえ岩屋に入ったとしても、そこに来ればいつでも会
うことができるじゃないですか。もう富士山に登る日
時も決めていきます。」と。

かぐや姫が富士山に登るといふ噂^{うわさ}は、瞬^{またた}く間に近
くの村から遠くの村まで広がり、姫を名残惜^{なごりお}しむ声は
やみませんでした。そして、かぐや姫が富士山へと登
る日時が来ると、身分の上下や年齢・性別を問わずに
多くの人が集まり、その様は大盛況^{さま だいせいきょう}の市場のよう
でした。普通でも別れが来れば名残惜しいものですが、
ましてや国中にならぶもののないほどの美女です。
その別れを名残惜しいと嘆かないものなどありません。
集まった人々は声をあげ、涙を流して泣きました。今
その場所を「憂^{うるい}涙河^{がわ}」（潤井川）と呼んでいます。

この当時、人々はまだ富士山を怖れて山中まで入っ
ていくことはしていませんでしたが、集まった人々は
かぐや姫との名残を惜しみ、富士山への怖れを忘れた
かのようにかぐや姫を追い山中に分けいってきました。
そしてたどりついた場所を今、中宮^{ちゅうぐう}と呼んでいます。

富士山の中宮より上には、女性は登ってはいけな
いことになっていました。富士山へと登っていたかぐや姫
は、この中宮まで戻り追いかけて来た人々に対して言
いました。「皆さんとは、ここでお別れをしなくては
なりません。」と。

この場所でお爺さんはかぐや姫に別れの一首を贈り
ました。「わたしはこれでまた世の中を憂う世捨て人
に戻ってしまいます。」と。

それに対してかぐや姫も一首を返しました。「心か
ら別れを悲しんでくれる人を思い、つい私も戻ってし
ました」と。

そしてその後、かぐや姫は、富士山の深い深い山中
へと入っていったのでした。実はかぐや姫は、神仏が
この世に姿を現した化身^{けしん}の姿であったのです。かぐや
姫は富士山の頂上^{しゃかがたけ}にいたると、釈迦岳の南の角の大岩
の岩屋の中へと入って行きました。人々はこれ以後、
富士山の頂上へ登ることが許されたのです。そもそも
かぐや姫は富士山のご神体であり、世の中の人々を救
うために女性の姿の浅間大菩薩^{せんげんだいぼさつ}という神となっ
て、この世に現れたのでした。

かぐや姫が富士山へと登った後、天皇は美女の噂を
たしかめるために駿河国へとやってきました。そして
かぐや姫の姿を自分の目で確かめるため、お爺さんを
伴って富士山へと登りました。天皇は頂上にいたる中
間ほどの場所^{かんむり}で、冠^{かんむり}を脱いで休憩をしましたが、そ
の冠が今は石となって、冠石と呼ばれています。

そして富士山の山頂で、天皇はかぐや姫と対面しま
した。天皇はかぐや姫の姿を見るととても喜び、とも
に富士山の岩屋に入ることを望みました。天皇に従っ
ていた臣下の者たちは、その姿に感動の涙を流したの
でした。実はお爺さんは愛鷹権現^{あしたかごんげん}という神がこの世に
現れたものであり、お婆さんは犬飼明神^{いぬかいみょうじん}という神が
この世に現れたものだったのです。